

九州日立マクセルの桜並木

伊方

吉武 厚さん



迎えてくれる桜

「坂を登ると鮮やかな並木が目飛び込んできて、まるで桜が出迎えてくれたようで、圧巻でした。九州日立マクセル（伊方に、一昨年四月に入社した吉武厚さん（飯塚市）内定の直後、土地勘を得ようと訪れた際に桜並木と対面しました。会社入口には国の登録文化財「旧三菱方城炭坑坑務工作室」もあり、浜みを増したレンガの赤とそれを覆う緑のツタが、当地の産業の変遷を物語っていました。吉武さんはこの歴史深い建物にも感銘を受けながら、身の引き締まる思いで入社式に臨みました。緑化事業で旧方城町が植樹したこの桜は、九州日立マクセルの入口へと続くメーン通りと並んでいます。満開の様はまさに百花繚乱といった趣。同社により、数



←会社玄関へ続く約200メートルの緩やかな坂に、すき間なく咲くソメイヨシノ。三菱方城炭坑の職員住宅街につながるこの坂は、炭坑時代に高給取りをさして「百円坂」と呼ばれていた。

「山の神」の桜

伊方

桑野ソノさん

悲しくも美しい桜

「桜を見るとあの人を思い出します。懐かしそうに、在りし日に思いをはせる桑野ソノさん（伊方・公園通り）。舞い散る桜を見ると、戦死した義弟・桑野邦夫

さんの面影が浮かぶといえます。俳人としても「園女」の名で高名で、

長年教師をつとめた桑野ソノさんは、現在九十七歳。嫁いだ当時、邦夫さんは勤務先であった伊方小学校の三年生でした。邦夫さんは優しく素直で、成績も優秀。実の弟がいないソノさんにと



やがて、三菱方城炭坑が最盛期を迎え、通称「山の神」と呼ばれる山神社では、花見の露店が軒を連ねたといえます。ここは、共に俳句を学んだ西山ひさしさんや日永田桜ん坊さんの句碑があり、ソノさんたちが桜の植樹をした記念すべき場所です。その隣には、周囲に桜が並ぶ公民館方城分館があり、句会に足を運び続けた日々の思い出が詰まっています。「わたしにとって、桜は常に身近な存在でした。桜の花はいつ見てもいいですね。でも散りゆく様はもの悲しい…」と語るソノさん。桜の話になると、義弟・邦夫さんの声が心に響きます。

「姉さん帰ろう」とはずんだ声をかけ、いつも学校の廊下じつと立って、帰りを待っていてくれた幼いころの邦夫さん。ソノさんは桜が咲くと決まって、職員室から出たときにみせた、あのあどけない笑顔の思い出します。

初花を宝のごとく仰ぎけり 園女
ソノさんは退職して間もなく「山の神」の桜の下に立ち、一番咲きの可憐な一輪を見上げて、こう詠（えい）いました。



↑三菱方城炭坑跡や炭坑事故被災者の碑などがある山の神。かつて炭坑の守り神が鎮座していた。

は日高公園があり、道は挟んで劇場が建つていました。花見でにぎわった日高公園でしたが、戦時中に「ぜいたくは敵だ」と、見事な桜も、花ごう岩の大きな門柱も倒され、イモやソノママの畑にかわりました。登校の際、ソノさんが邦夫さんとくぐった桜並木の一部は、惜しくも姿を消しました。



「山の神」は地域交流センターに入る道から中央保育所裏の坂を上ったところにあります。九州日立マクセルの桜並木は、伊方橋の5差路から緩やかな坂を上ると視界に入ります。